

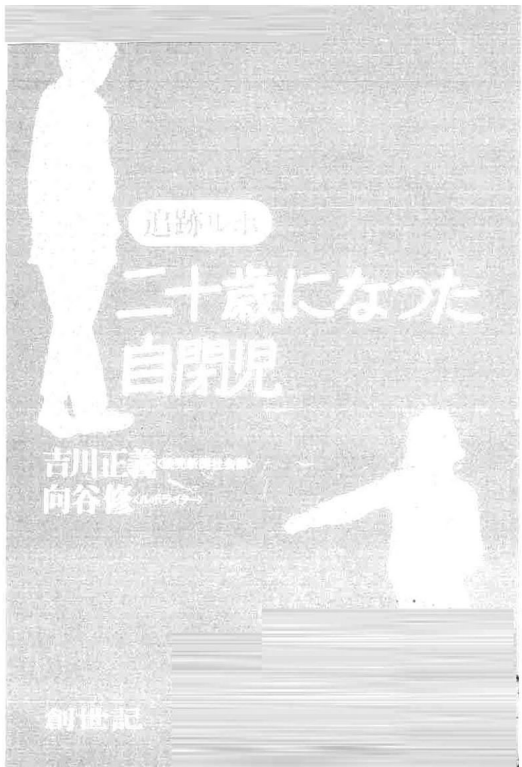
追跡ルポ

二十歳になった自閉児

吉川正幸

吉川正幸





追跡ルネ

二十歳になった 自閉児

吉川正義 （発達障害研究家）
向谷修 （心理カウンセラー）

創世記

追跡ルポ・二十歳になった自閉児

昭和五四年二月五日 初版発行
昭和五四年四月十日 第三刷発行

著者——吉川正義・向谷修

装本——郡幸男

発行者——細萱尚孝

発行所——株式会社 創世記

東京都港区元赤坂一―四―二一赤坂パレスビル

電話東京（〇三）四七八―一〇二一

振替東京三一六二二四二

印刷・製本——日本製版株式会社

定価——九八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

©一九七八年 検印廃止

追跡ルポ・二十歳になった自閉児

目次

ブローグ ————— 7

観察児童NO・I 早川しのぶ ————— 15

自閉児とは ————— 38

観察児童NO・II 山崎隆二 ————— 47

アスベルガー型・カナー型 ————— 66

観察児童NO・III 竹山裕子 ————— 73

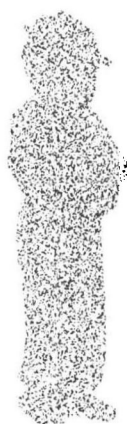
武蔵野日赤子ども相談室 ————— 89

観察児童NO・IV 隅田澄子 ————— 93

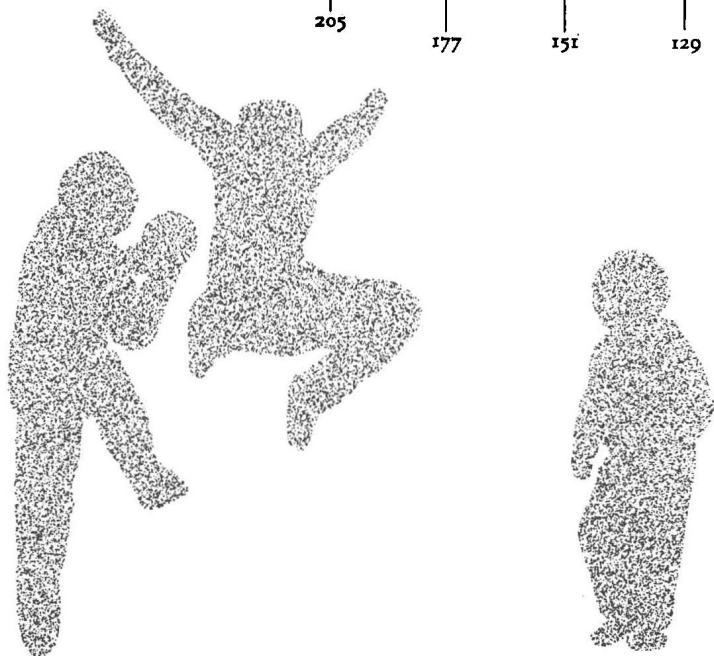
二つの事件 ————— 105

観察児童NO・V 武川靖彦 ————— 111

自閉症児親の会 ————— 124



主要参考文献	247
あながき	245
エピソード	239
こころみ学園	231
養護学校義務化	224
観察児童NO・IX X XI XII XIII	205
自閉児の予後	201
観察児童NO・VIII 原田秀雄	177
ゆりのき学級	168
観察児童NO・VII 吉田晃雄	151
二つの挑戦	141
観察児童NO・VI 辻村知次	129



*——この項のみ45年度1年間の変化

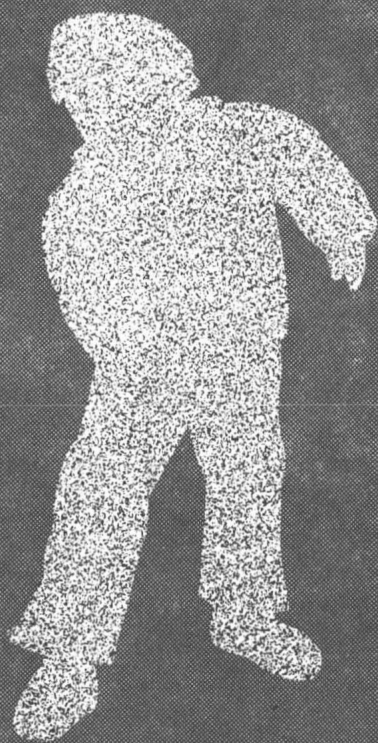
[illegible]

自閉症児の行動特徴の2年間(S.44,45年度)の変化(都立教育研究所の資料より)

注——氏名番号は本書の目次に従って組み替えた

氏名	I	II	III	IV	V	VI
性別	♀	♂	♀	♀	♂	♂
観察時在籍学年	2 3	1 2	4 5	4 6	3 4	1 2
観察項目/評価段階	d e b a	d e b a	d e b a	d e b a	d e b a	d e b a
対人関係 まなざし	○	○	←---	→	→	→
	表情	→	○	○	○	→
	名前を呼んだ時	○	○	→	←	→
	話しかけた時	←---	←---	○	→	→
	友だちに 対する関心	○	○	→	→	○
	先生に 対する働きかけ	○	○	○	→	→
	動作や遊びのくり かえしを禁止した時	/	/	/	→	→
	ひとりでにやにやした りグダグダ笑うこと	/	○	→	→	→
集団参加 勝手に動きま	○	○	→	○	→	→
	授業への参加	→	○	○	←---	→
	仲間との遊び	○	○	○	○	→
言語	おうむ返し	→	→	←---	○	→
	奇声を発する	→	/	/	→	○
	ひとりごとを云ったり ブツブツぶやく	→	→	→	→	→
	ことばの量	○	→	○	○	→
こだわりや くりかえし	同じ質問を何回も くりかえすこと	○	/	←---	/	/
	同じ動作や遊びの くりかえし	→	/	○	→	→
	行動の順序が型通 りきまっていること	→	/	→	→	○
	一つのことに興味 を示し熱中すること	→	→	/	○	○
身のまわり の始末	食事	/	○	→	/	→
	衣服の着脱	→	○	○	○	→
	登下校の準備	→	→	○	/	/

プロローグ



「古傷に触られるようで、どうしても素直には応じられない。特にこの木の芽時はいけません。Aの気持ちが悪くまで考えさせて下さい」

私の会社を訪ねてきたA君のお父さんは、こう言った。自宅に来られるのは困るといって、神奈川県S市の自宅から、わざわざおいで下さったのだ。懸命に取材意図を説明したが、Aさんの気持ちは変わらなかった。

Aさんが帰られた後、「古傷」という言葉と、「木の芽時」という言葉が、私の胸に焼きつくように残った。

Eさんの家は四回訪れた。最初の訪問の時、女子大生らしい若い女性が「弟のことをどこで知りましたか」と、問いかけてきた。突然であったこともさることながら、我々の取材意図が簡単に理解できなかったであろう。詰問するような厳しい口調であった。

三度目の訪問でE君のご両親にお会いできた。お母さんは静かなたずまいの婦人だった。

そのお母さんが最後に言った。

「話したいことがいっぱいあります。山ほどあります。しかし、それを話したからといって、何があの子のためになるのでしょうか……」

その通りであった。我々が、E君のために直接役立てることは、何もなかった。そのことを我々は十分理解していたが、改めて問いかけられた時、答える言葉がなかった。我々は「もう一度考えて下さい」とお願いして、Eさん宅を離れざるを得なかった。

W君の自宅は都心のマンションである。あらかじめ人を介して取材を依頼したところ、いったんは承諾されたが、数時間後に「やはりお断りしたい」と、丁寧な電話をいただいた。しかし、それだけで取材をあきらめるのは情けないと思い、予告しないままにマンションを訪れた。

ドア越しにこちらの身分を名乗ると、お母さんが慌てて飛び出してきた。

「うちの子はもう自閉症ではありません。せっかくおいでいただいたのに申しわけありませんが、そつとしておいて下さい」

取りつく島がないままにお母さんの姿はドアの蔭に消えた。本当にすまなそうに何度も頭を下げながら……。

増える自閉児

——私たちの取材は、昭和五十二年四月に始まった。取材の目的は、次の「お願い」につきている。私たちはこの「お願い」を示しながら歩き続けた。

お願い

自閉症に対する教育、社会行政が立ち遅れています。わが国で自閉症の研究が始まってから約四分の一世紀が経過したわけですが、この間に研究はどう進み、社会や行政はどう対応してきたのでしょうか。一応の成果は認められるものの、根本的な問題は何一つ解決してい

ないのが現状ではないでしょうか。

まず、社会全般の自閉症に対する理解があげられます。確かに自閉症という言葉は一般化したのですが、言葉だけが一人歩きをして、自閉症児やその家族の苦しみは、一向に理解されていません。

行政についても同じことが言えます。これまでに、さまざまな分野で、いくつかの試みがなされてきましたが、その多くは、母親たちの血みどろの闘いによって得られたものです。決して行政側が「理解を深めた」結果からではありません。現に、自閉症児に対する教育・医療・福祉は、あらゆる障害児問題の中で最も遅れた分野ですし、年長自閉症児問題は、福祉行政の谷間でさらに深刻さを増しています。

原因究明↓治療・教育方法の探究も遅れがちです。本来、国が組織的に取り組むべき課題なのに、一部の教育関係者や医療関係者にまかせられているのが現状です。

私たち取材班は、これまでの取材で、自閉症児問題に関する社会の認識の浅さと、行政の立ち遅れを痛感しました。この現状をなんとか改めさせなければなりません。私たちは取材の範囲を広げることにしました。

東京都立教育研究所がその教育的立場から、十三人の自閉症児を観察し始めたのは、昭和四十四年のことです。その子どもたちは、いまだどんな生活を送っているのでしょうか。

私たちは、この十三人の子どもたちを追跡調査することで、自閉症児問題の全てを明らか

にすることができると考えました。つまり十三人の自閉症児とその家族のさまざまな体験が、社会と行政に対する「告発状」になる、と考えたのです。その「告発」は、ひいては教育や福祉行政を改めさせると確信します。

この「お願い」に対する一つの反応が、冒頭のAさんたちのエピソードだ。取材前の編集会議で、「取材の壁」がある程度予想していたが、それは想像以上の厳しさであった。十三人の家族やその関係者ばかりではない。東京都立教育研究所の取材協力もほとんど得られず、私たちの取材は、十三人の氏名、住所の「割り出し」から始めなければならなかった。

いま、自閉児が増えてきているという。どのように増えてきたか、というデータはどこにもないけれど、自閉児の教育や治療にたずさわる人々、とりわけ現場で自閉児とその母親に触れている教師たちが、体験的に増加を感じ取っている。そして、これらの現場の教師たちが、声をあげて叫んでいるのが「早期発見」「早期治療」「早期教育」の大切さだ。「発見が遅れば遅れるほど、治療と教育が難しくなる」というわけだが、ある年齢を越えた自閉児の治療と教育は、事実上不可能になっているのが現状だ。

さらに最近、自閉症の原因を「脳障害」と捉える専門家が増えてきた。その可否は私たちには分からないが、脳障害説の立場をとる人たちも、障害の早期発見、早期治療・教育の立場は変わらない。単に自閉児であることを早く見つけるというだけではなく、一つ一つの障害を早期発見して、少しづつ

つ治療して行こう、と主張している。

年長になった自閉児を取り巻く環境は深刻である。治療の手だてではなく、教育を受ける機会も極端に狭い。障害者が当然受容できるはずの福祉すら、年長自閉児には無関係に思える。

増えているという自閉児は、いわば深刻な年長自閉児の「予備軍」と言えるだろう。私たちが、さまざまな障害にぶつかりながら、あえて取材を強行していった一つの背景には、年長自閉児問題をこれ以上深刻にしてはならないという、ジャーナリストとしての使命感があった。社会や行政の無理解を追及し、「早期発見」「早期治療・教育」できる体制を作ってほしい、という願いを込めた。

ある事件報道

昨年（昭和五十二年）、ある全国紙に「自閉症の東大生が放火」という記事が出たことがある。四段抜きの見出しがつけられた大きな記事だった。学生寮で生活していた無口な東大生が、ノイローゼが昂じて大学の施設に放火したという事件である。この東大生は、日ごろ友だちから「あいつは自閉症だ」とうわさされていた。友だちとも口をきかないし、一人で部屋に閉じ込もっていることが多い。それで「自閉症」と言われるようになったらしいが、この東大生が専門家から「自閉症」と診断されたことは一度もない。「自閉症」という言葉だけが一人歩きし、それが全国紙の見出しにもなった典型的なケースだろう。

無口な人間をつかまえて、「あいつは自閉症じゃないか」と言うことがある。自閉児を持つ親にと

つては、耐えがたい比喩だ。この事件でも、新聞記者に自閉児に対する理解があれば、「自閉症の東大生が放火」という見出しはつかなかったはずだ。「自閉児」と「無口な人間」とは、全く違う。

五十一年五月十四日、横浜地裁で子殺し事件の判決があった。母親（当時三十五歳）が、八歳になる自閉児をタオルで絞め殺した悲しい事件だった。

判決は、懲役三年、執行猶予三年（求刑は懲役四年）であった。執行猶予がつけられたのは、「子どもを保護する責任がある母親が、わが子を殺した罪は許し難いが、情状は同情すべきであり、改心の情も顕著だ」という理由からである。

殺人事件としては刑の軽い判決だが、それだけならとりたてて珍しい判決ではない。子殺しではよくあるケースだろう。

この事件と判決が、世間の注目を集めたのは、判決のあと、裁判長が「個人的な意見だが」と前置きをして、次のように述べたためだ。

「あなた一人が苦しまなければならなかったのはあわれだ。もっと教育環境や福祉施設が充実していれば、こんなことは起こらなかったかも知れず、事件は社会全体の責任でもある……」

殺された子どもは、四歳の時自閉児と診断された。母親は、医療機関、通園施設を転々と訪ね歩く。だが、その子は学齢期になっても小学校へ入れない。特殊学級の入級も断わられた。母親は、一歳五か月の長女を背負い、片道一時間半をかけて通園施設に通い続けた。それでもわが子の異常行為はなおらない。一年たち、二年たち、四年が過ぎた。

疲れはてた母親は「このままではこの子は幸せにならない。いつそ殺した方が……」と、考え始める。絶望感に襲われた時、いつも「いつそ殺した方が……」と思う。そしてある日、発作的にわが子の首をしめた――。

この二つのケースが、自閉児問題の今日的状況をよく説明している。前の放火事件は、自閉児に対する一般的な「理解度」を端的に表わしているし、子殺し事件は、理解なき社会への「悲しい告発状」といえるだろう。「あなた一人が苦しまなければならなかったのはあわれだ」とした裁判長の個人的意見に、この母親の、説明し尽せない労苦が秘められている。

自閉児は、子どもの精神（情緒）的障害の中で最も治療・教育の困難な障害だと言われる。このレポートは、そうした子どもを背負って懸命に生きている母親たちの記録でもある。このレポートの中で、十三人とその家族の名前は、全て仮名やイニシアルとした。「子どもたちがいま精いっぱい生きている生活の場を守って下さい」という母親の気持ちを、大切にできなかったためだ。